

## 公開研究会の実績・成果と課題

### 公開研究会の実績

今年度の公開研究会は向山小が外国語科・外国語活動の研究を始めて以来、初めてのオンライン形式での公開となった。10月31日～11月14日まで、全クラスの授業を You tube で配信した。You tube での再生回数は合計で約600回であった。

全体会の流れは以下の通りである。(3の研究概要は別資料)

- ・ 校長挨拶と講師紹介は協議会開始前の画面でスライドショーで表示
- ・ 1・研究概要
- ・ 2・各学年より
- ・ 3・質疑応答
- ・ 4・講師の先生方から

### 質疑応答で出された質問

- ・「小中高連携、内容や連携先をどうやって決めたか。なぜ、千葉南高校と連携したのか。」  
→研究主任、葛南教育事務所の秋本晴美主席指導主事が回答
- ・「6年生の授業。ナチュラルに過去形の知識が定着している。パフォーマンステスト等含め、評価の方法が知りたい。普段の授業ではどのようにされているのか。」  
→6年研究推進委員が回答
- ・「音や体の動きを使って一緒に活動していた。英語に慣れ親しむのに五感を使っている。他の教科でも使えたらと参考になった。向山小学校は教育課程特例校の指定を受けているが、英語の教科書がない学年の指導計画、カリキュラムの組み方をどのようにしているのか」  
→研究主任が回答
- ・「Zoom で初めて顔を合わせる人と話すのは緊張すると思うが、楽しくフリートークをしていた。リアクションがいい。普段、どのようにリアクションを教えているのか。3年生からでも間に合うのか。」  
→研究主任、5年担任が回答
- ・「5、6年生は、グループで発表している場合のどのように立ち回り評価しているか。」  
→4年研究推進委員、5年担任が回答
- ・「指示を日本語で出している場合が多かった。どういう基準で分けているのか。また、子どもたちが積極的にコミュニケーションをとっていたが、話すのが極端に苦手な子や場面緘黙のお子さんにはどういった対応をしているのか。」  
→1年担任が回答

## 講師の先生方から

小中高連携モデル事業担当 葛南教育事務所指導室 主席指導主事 秋本 晴美先生

- ・どの先生のクラスも、子どもたちが生き生きと外国語に取り組んでいる。長い蓄積を基に、先生方が一丸となって研修を行い、さらなるスキルアップを目指している。全学年全クラスが動画を撮影し、全国の皆様からご意見、質問をいただいたことは、大きな財産。先生方が子どもたちの前に立って楽しんでいる姿、外国語教育を進めているのが素晴らしい。
- ・“BEST”は一筋通っていて、共通で取り組んでいることも素晴らしい。
- ・小中高連携モデル事業は葛南教育事務所の中の3校で取り組んでいる。昨年度は6年生が谷津干潟の調査結果を基にクイズを作った。この実践が動画で見られる。習志野市の自然環境、地域性を取り入れた授業だった。
- ・第七中学校は小学校との連携を意識して谷津干潟についての発表に取り組んでいる。千葉南高校は、プレゼンテーションを主体的に学ぶ姿を目指している。
- ・小中高の連携がさらに発展していったら欲しい。

低学年講師 第六中学校 笹原 真哉先生

- ・外国語の特例校として8年目。毎年、カリキュラムは吟味して行ってきた。中学年、高学年につながる発達段階に合わせた指導を行ってきた。1年生は就学前の家庭環境が異なり、外国語に慣れ親しんでいる子もいれば、初めて触れる子もいて、配慮が必要不可欠。5つのポイントを示す。
  1. 英語を通して人と関わる楽しさを味わう。相手を知り、相手を思いやる習慣を身に付けさせる。他者理解、人間関係作りに役立つ。
  2. 学級担任が指導する。カリキュラムマネジメント。他教科との関係が自由にできる。
  3. JLT、ALTとの役割分担やスモールステップ、クラスルームイングリッシュの活用、めあての活用と振り返りに配慮しながら授業をする。
  4. 児童の心構え。“BEST”を奨励。
  5. 単元の前半は基礎基本や知識理解の指導が主となり、単元末に、思考力判断力表現力を養うような深い学びの活動を入れる。特に表現力は本校の研究主題と大いに関連している。
- ・1年 国語科とのカリキュラムマネジメント  
動物に焦点をあて、“What’s this? It’s～.”の表現を使った。  
石川学級では、学級担任が作成した動物クイズを班ごとで出し合い、Yes.や No, sorry.をジェスチャーを交え答えた。  
岡田学級では、単元のまとめとして、タブレットを使い、班ごとに自分たちで作った動物クイズを出し合うクイズ大会を行った。タブレットは自由に画面の拡大縮小ができ、効果的だった。
- ・2年 What time is it?  
歌やチャンツで、数や時間の表現に慣れ親しんだ後、相良学級では、図工との関連で自ら作ったオリジナルの時計で、時刻を尋ねあった。豊富なクラスルームイングリッシュで的確な指示を出し、ジェスチャーが活発なコミュニケーション活動ができた。  
単元末の高山学級ではグループで設定した時刻を、時刻ならではの状況を表す英語の寸劇を行い、時刻

クイズを出し合った。各班とも既習表現を使ってさまざまな工夫が見られた。

- ・ 5つの大切なことを意識しながら、また、自分の考えや気持ちを伝えるとともに、相手の気持ちを理解した、双方向のコミュニケーション活動ができた。
- ・ 低学年の発達段階にあった、表現力や技能面を伸ばすことができた。

高学年講師 習志野市教育委員会指導課指導主事 小野章先生

- ・ 担任の先生が主体となって英語の授業を行う取り組みの中での発見が大切である。
- ・ 担任の先生方のキャラクター、暖かい姿勢が授業に十分反映されたものだった。子どもたちが英語を発話するのは勇気があるものだが、担任の先生が温かく見守ってくれるからこそ、英語で話してリアクションして、友達同士の良いところを発見していった。
- ・ テーマに小中高の連携がある。リアクションの大切さが身に染みて感じられた。
- ・ “BEST”を掲示し、小学校段階で求めるリアクションの基本を1～6年までしっかり徹底して根付かせることで、最高学年の6年生の豊かなコミュニケーション活動が生まれる。これも、担任の先生方の授業中のリアクションが良いモデルになっている。
- ・ 中学校では、こういったリアクションの上にコミュニケーションストラテジーの段階にもっていくということが必要。
- ・ 5、6年生の授業で、英文の提示がほとんどなかった。中学校の英語を前倒して小学校にもってくる実践はよくある。英文を見るとリアルなコミュニケーションに近づかないことがある。文を見ずに相手と目線を合わせて、覚えた表現を使ってコミュニケーションがとれていた。仮説の手だて1がうまくいった。
- ・ 6年生のオンラインのコミュニケーションは目的、場面、状況のある中でのリアルなコミュニケーションだった。フィリピンを紹介している先生と、“Where are you from?” “I’m from Philippines.” と尋ね合い、児童は“Nice country!”とリアクションをした。フィリピンの先生はものすごい笑顔で、“Thank you!”と言った。これは、聞く側の話をしている方への相手意識が働いた場面である。通常、話す時に聞いている人のことを考えて話すことはするが、聞いている時に、どうやって聞いたら相手が気持ちよく話せるか考えるのは難しい。これこそ、仮説2の目的、場面、状況の中で“BEST”をやってきたことが生かされた習慣だと思う。
- ・ 仮説2がどのように生かされたか検証するのは、おそらく中学校段階。向山小学校で育まれた豊かな温かいコミュニケーション力が、子どもたちにどれだけ根付いて力となっていったのか、こんどは中学校で見取っていく必要がある。

中学年講師、全体講師 千葉県立国分高等学校 教頭 水島真一郎先生

- ・ 向山小学校の研究が始まってから、ずっと関わっている。英語が専門じゃない先生が英語を教える中で、プラスになることを2つ。

#### 1. 必然性のある活動を組み立てる

小学校は生活の場面での必然性は難しい。教室の中という閉じられた空間であっても、英語を使うことで充実した時間ももてる。そのための教科等横断的な活動を通して、他教科で学んだことを英語でやってみて学んだことを生かすことが大事である。

## 2. 相手意識

相手意識のなかでも、リアクション、ジェスチャーが取り沙汰されるが、分かったら分かったと首を縦に振る、分からないなら横に首を振る。そういった小さなことからしっかりとしようとする。それが、積極的に話す、聞く、そういった態度の育成につながる。

高校の授業でスピーチをやるが、「よいスピーカーを育てるのは良い聞き手」よい聞き手を育てる意識を、先生方が常に思っていたいて授業をしているのが、今回の姿だったと思う。

## 公開研究会での成果と課題

### 成果

- ・オンラインの公開研究会だったので、全国の先生方に授業を見ていただく機会に恵まれた。
- ・水島先生から、自分の授業を客観的に見直すことは、授業力向上のために最も効果的であるという主旨の話があり、公開研究会の有無に関わらず、ビデオ撮影で記録を残すことは大切であった。
- ・「小中高連携を意識した英語の指導法」という向山小の研究テーマに、学校全体が一つとなり取り組めたことはよかった。2つの仮設もうまくかみ合っていた。
- ・担任がT1となり授業をすることで、教科等横断的な取り組みを行うことができ、児童が思考力・判断力・表現力を身に付けるのに、無理なく目的・場面・状況を設定することができた。
- ・全学年に共通して意識させたい授業のポイントを“BEST”とし、共通理解を図ったのが分かりやすくよかった。
- ・質疑応答では様々な学年の先生方が積極的に質問に答えていた。一人ひとりの研修の成果が表れている。
- ・8年間の研究が少しずつ成果となって表れ、各学年の研究が積み重ねられている。特に今回は、6年生のブレンディット授業が公開の目玉となり、6年生が、1年生から積み上げてきた成果が目に見える形で発表することができた。

### 課題

- ・初めてのオンライン公開であったが、やはり実際に授業を行う公開研究会の方が授業を行う方も見る方もベストだと思う。しかし、全学級を授業展開するとなるとALTの数が足りなくなることが予想される。JLTの数も含めて、今後の課題である。
- ・全体会の時間が1時間と短く設定したために参加しやすさはあったが、相手に逆質問をするなど議論を深めたり、講師の先生方からご指導をいただいたりするのに十分な時間が確保されなかった。
- ・授業の動画を編集するという膨大な作業や参加者の取りまとめなどを管理職の先生方がすべて引き受けてくれた。今後このノウハウをどう引き継いでいくのか、或いは業者へお願いするのかなど、オンライン公開ならではの課題がある。

## 全体的な成果と課題、来年度に向けた対策

### 成果

- ・ 1学期に行った授業研究でも、教科等横断的な取り組みは児童の知的好奇心を引き出し、目的・場面・状況を設定する上でかなり効果的であった。
- ・ 昨年度と今年度で授業研究を行う教員全員が学研 Kimini 英会話を受講した。生きた英語を学ぶ機会を得られたことは、英語の指導力と英会話力のスキルアップにつながった。
- ・ ALT の 1人が2年連続して向山小に来てくれた。このことは、2年計画の小中高連携モデル事業を行うにあたり、昨年度からの研究をスムーズに積み重ねることができて大変ありがたかった。

### 課題と対策

- ・ 公開研究会の質疑応答でも日本語で指示を出すことが多いことを指摘された。学年の発達段階もあるが、なるべく指示は英語で出せるように研修の機会を設けていきたい。
- ・ 学年でどんな実践を行っているのかを研修日に皆で共有していき、更に研究を積み重ねていきたい。
- ・ ALT との役割分担の明確化など、効果的な活用法について皆で考える時間を設けていきたい。
- ・ 評価については、今後更なる研究が重要であると感じる。記録に残る評価について、単元計画を考える際にどう組み入れていくのかを国研を参考にしながら作っていきたい。
- ・ Can-do リストを全学年に作り、児童にも分かりやすい単元ごとの到達目標を作り、パフォーマンステストなどを行っていく。
- ・ 文字指導をどう行えば中学へと滑らかに連携していけるかの研究をフォニックスを絡めながら、考えていく。
- ・ タブレットなど ICT 機器を活用した授業づくりを ICT 支援員の協力を得ながら行う。
- ・ 小中高連携は英語を教える上で欠かせないことである。特に中学とは習教研を通じてこれからも情報交換や授業参観などを積極的に行っていきたい。